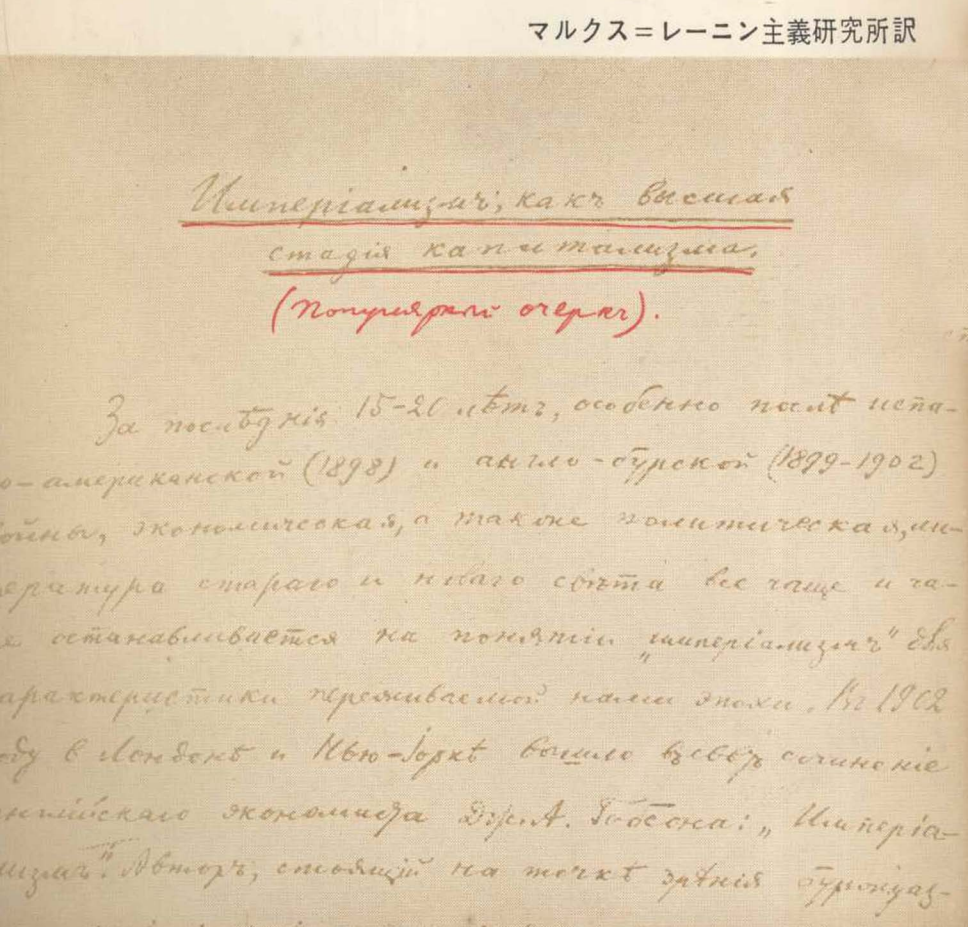
レーニン選集

6

マルクス＝レーニン主義研究所訳



Имперіализмъ, какъ высшая
стадія капитализма.
(Популярный очеркъ).

За послѣднія 15-20 лѣтъ, особенно послѣ испано-американской (1898) и англо-бурской (1899-1902) войны, экономическая, а также политическая литература стараго и новаго свѣта все чаще и чаще останавливается на понятіи „имперіализмъ" какъ характеристики переживаемой нами эпохи. Въ 1902 году в Лондонѣ и Нью-Іоркѣ вышло въ свѣтъ сочиненіе англійскаго экономиста Дж. А. Гобсона: „Имперіализмъ". Авторъ, стоящій на точкѣ зрѣнія буржуаз-

レーニン選集　第6冊　¥ 250.

1957年11月10日　発行

訳　者　マルクス・レーニン主義研究所
レーニン全集刊行委員会

発行所　株式会社　大　月　書　店
東京都文京区本郷1の15
電　話 (92) 3091・7887
振　替　東京16387

三晃印刷・田中製本

はしがき

一　この選集は、ソ同盟マルクス＝レーニン主義研究所編『レーニン二巻選集』をもとにし、同研究所と日本のマルクス＝レーニン主義研究所との意見でいくつかの論文を加除して編集したものである。

一　翻訳には現行版としてもっとも権威のある『レーニン全集』第四版を底本につかった。全集のどこに入っているかは各論文末にしめしてある。

一　原注は（1）（2）……でしめして各段落のつぎに、訳注は＊印をつけて人名注とともに巻末にかかげておいた。ただし人名注は、本文のなかではいちいち印をつけずに、一括してアイウエオ順に配列してある。なお、本文中〔　〕内の六号または六ポイント組の挿入は訳者による補注である。

一　訳文のなかで傍点がついている個所は原文ではイタリック体になっている。ゴシック体のところは原文では同様ゴシック体である。

一　訳出には全集刊行委員会の翻訳者団と校閲者団が責任をもってあたり、術語・用語・文体・字づかいの統一をおこなってある。

目次

資本主義の最高の段階としての帝国主義　平易な解説……五
序　文……五
フランス語版とドイツ語版の序文……六
一　生産の集積と独占体……一三
二　銀行とその新しい役割……二五
三　金融資本と金融寡頭制……三九
四　資本の輸出……五三
五　資本家団体のあいだでの世界の分割……五六
六　列強のあいだでの世界の分割……六五
七　資本主義の特殊の段階としての帝国主義……七五
八　資本主義の寄生性と腐朽……八四
九　帝国主義の批判……九三
一〇　帝国主義の歴史的地位……一〇五
マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」とについて……一一
一　戦争と「祖国擁護」とにたいするマルクス主義的態度……一二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二　「われわれの新時代観」……一一九
三　経済的分析とはなにか？……一二三
四　ノールウェーの実例……一三一
五　「一元論と二元論」について……一三八
六　ペ・キエフスキーがとりあつかって歪曲した、その他の政治問題……一四七
七　結び。アレクシンスキーのやり方……一六〇

プロレタリア革命の軍事綱領……一六二

帝国主義と社会主義の分裂……一七三

単独講和について……一八九

事項注……一九九
人名注……二〇五
解　説……二一五

資本主義の最高の段階としての帝国主義

平易な解説

序文

ここに読者に提供する小冊子は、一九一六年の春にチューリヒで書いたものである。仕事をしたその土地の事情から、私はおのずから、フランスとイギリスの文献のある程度の不足に、またロシアの文献の著しい不足を味わなければならなかった。それでも私は、帝国主義にかんする英文の主要な労作であるJ・A・ホブソンの著書を、十分な注意をはらって利用した。この労作は、私の確信するところでは、そのような注意を受けるにあたいするものである。

この小冊子は、ツァーリズムの検閲を顧慮しながら書かれた。だから私は、自分の仕事をごく厳重に、もっぱら理論的な――とくに経済的な――分析にかぎらなければならなかったばかりでなく、やむをえず政治についてわずかばかり言及するばあいにも、非常に用心ぶかく、暗示的に、すなわちイソップの言葉で〔たとえ話で〕――ツァーリズムのもとでは、革命家が「合法的な」著作を書くためにペンをとるときにはかならずたよらざるをえなかった、あのいまいましいイソップの言葉で――言いあらわさなければならなかった。

いま、自由の日に、この小冊子の、ツァーリズムの検閲を顧慮したためにゆがめられ、鉄の万力によって押しつぶされ、締めつけられたこれらの個所を読みかえすことは、苦痛である。帝国主義が社会主義革命の前夜であること、社会排外主義（口さきでは社会主義、行動では排外主義）が社会主義にたいする完全な裏切りであり、ブルジョアジーのがわへの完全な移行であること、また、労働運動のこの分裂が帝国主義の客観的諸条件と結びついていること、等々について、私は「奴隷の」言葉でかたらなければならなかった。だから私は、これらの問題に関心をもつ読者には、一九一四―一九一七年に私が国外で書いた諸論文の近く出される再版を、参照していただかなければならない。だが、とくに注意しておく必要のある個所が一つ、一一九―一二〇ページ〔本書、一〇四―一〇五ページ〕にある。そこでは、資本家や、彼らのがわに移行した社会排外主義者たち（カウツキーは彼らとまるで不徹底に

しか闘っていない）が、領土併合の問題についてどんなにあつかましくうそをついているか、また社会排外主義者たちが自分たちの資本家による領土併合をどんなにあつかましくとりつくろっているかを、検閲をとおる形で読者に説明するために、私は例として……日本をとらなければならなかった！　だが、注意ぶかい読者なら容易に、日本のかわりにロシアを、朝鮮のかわりにフィンランド、ポーランド、クールランド、ウクライナ、ヒヴァ、ブハラ、エストニア、その他、大ロシア人でないものの居住する諸地方をおいてみるであろう。

私はこの小冊子が、現在の戦争と現在の政治とを評価するさいにそれを研究しておかなければなにも理解できない根本的な経済問題、すなわち帝国主義の経済的本質の問題を、読者が理解するのに役だつことを期待したい。

著　者

ペトログラード　一九一七年四月二十六日

フランス語版とドイツ語版の序文*

一

この小著は、ロシア語版の序文で述べたように、一九一六年に、ツァーリズムの検閲を顧慮しながら書かれたものである。私はいま全文を書きなおすことはできない。またそうすることは、おそらく当をえたものでもないであろう。なぜなら、本書の基本的な任務は、すべての国の争う余地のないブルジョア統計の総括的資料とブルジョア学者たちの告白とにもとづいて、国際的な相互関係における世界資本主義経済の概観図が、二十世紀の初めに、すなわち最初の全世界的な帝国主義戦争の前夜に、どのようなものであったかをしめすことであったし、いまもなおそうだからである。

また、先進資本主義諸国の多くの共産主義者たちにとっては、ツァーリズムの検閲の見地からさえ合法的な本書の実例によってつぎのような確信をえることは、いくらか有益でさえあるだろう。すなわち、この実例によって、たとえば最近共産主義者がほとんどひとりのこらず逮捕されたあとの現在のアメリカやフランスの共産主義

者たちに、いまなおのこされている合法性のわずかばかりの残片をも利用して、「世界民主主義」にたいする社会＝平和主義的*な見解や希望がまったく虚偽であることをあきらかにすることが可能であり、また必要である、という確信をえることである。だが私は、検閲に付せられたこの小著にたいするぜひとも必要な補足を、この序文のなかであたえよう。

二

本書のなかで証明されているとおり、一九一四―一九一八年の戦争は、どちらのがわからしても帝国主義戦争（すなわち、侵略的、強盗的、略奪的な戦争）であり、世界の分けどりのための、植民地や金融資本の「勢力範囲」等々の分割と再分割のための戦争であった。

というのは、ある戦争の真の社会的性格、もっと正確にいえば、真の階級的性格が、どのようなものであるかということの証明は、いうまでもなく、その戦争の外交史のうちにではなく、すべての交戦列強の支配階級の客観的立場の分析のうちにふくまれるものである。この客観的立場を描きだすためには、いくつかの実例や個々の統計数字をとりだすべきではなく（社会生活の現象は非常に複雑であるから、どんな命題の論証のためにも、実例や個々の統計数字をすきな量だけいつでも探しだすことができる）、ぜひとも、すべての交戦列強と全世界との経済生活の基礎にかんする資料の総体をとりあげなければならない。

一八七六年と一九一四年における世界の分割（第六章）ならびに一八九〇年と一九一三年における全世界の鉄道の分割（第七章）をえがくにあたって私が引用したのは、まさにこのような、反駁の余地のない総括的な資料であった。鉄道は、資本主義産業のもっとも主要な部門である石炭業と製鉄業との総括されたものであり、また、世界貿易とブルジョア民主主義的文明との発展のもっとも明白な指標である。鉄道が、大規模生産と、独占体と、シンジケート、カルテル、トラスト**、銀行と、また金融寡頭制と結びついていることは、本書のまえのほうの諸章でしめされている。鉄道網の分布、その分布の不均等、その発展の不均等、――これらのことは、世界的規模における現代の独占資本主義の総結果である。そして、この総結果は、生産手段の私的所有が存在しているかぎり、このような経済的基礎のうえでは帝国主義戦争は絶対に避けられないものであるということをしめしている。

鉄道の建設は、単純な、自然的な、民主主義的な、文

化的な、文明を普及させる企業のように見える。それは、資本主義的奴隷制を美化して報酬をもらっているブルジョア教授連や、小ブルジョア的俗物どもの目には、そのようなものとしてうつる。だが実際には、数千の網の目によってこれらの企業を生産手段一般の私的所有と結びつけている資本主義の糸は、この鉄道建設を、（植民地および半植民地の）一〇億の人々――すなわち従属諸国における地上人口の半分以上と「文明」諸国における資本の賃金奴隷と――にたいする抑圧の武器に転化させたのである。

小経営主の労働にもとづく私的所有、自由競争、民主主義――これらは資本家と彼らの新聞が労働者と農民をあざむくためにもちいているスローガンであるが、――これらすべてのスローガンは、遠い昔のものとなった。資本主義はひとにぎりの「先進」諸国による地上人口の圧倒的多数の植民地的抑圧と金融的絞殺の世界的体系に成長した。そして、この「獲物」の分配は、世界的に強力な、頭のてっぺんから足のさきまで武装した二―三の強盗ども（アメリカ、イギリス、日本）のあいだで行われ、そして彼らは、自分たちの獲物の分配をめぐる彼らの戦争に全世界をひきずりこむのである。

三

君主制的ドイツによってさしずされたブレスト＝リトフスクの講和*と、ついで、「民主主義的」共和国アメリカとフランスならびに「自由な」イギリスによってさしずされた、それよりはるかに残酷で卑劣なヴェルサイユの講和とは、帝国主義のお雇い文筆苦力（クーリー）や、平和主義者や社会主義者だと自称しているとはいえ、「ウィルソン主義**」を讃美（さん）して、帝国主義のもとで平和と改良とが可能であることを証明しようとしてきた、反動的な小市民たちやの正体をあばきだすことによって、人類にきわめて有益な貢献をした。

戦争――金融的強奪者のイギリス団とドイツ団とのどちらがより多くの獲物を受けとるべきかということをめぐって行われた戦争――があとにのこした幾千万の死者と不具者、およびその後のこれらの二つの「平和条約」は、ブルジョアジーによって打ちのめされ、抑圧され、あざむかれ、愚弄されてきた幾百万、幾千万の人々を、かつてなかったような速さで目ざめさせている。こうして、戦争によってつくりだされた世界的荒廃を基盤として、世界的な革命的危機が成長している。この危機は、それがどんなに長くて困難な転変をへようとも、プロレ

タリア革命とその勝利とをもって終りをつげるほかはない。

第二インタナショナルのバーゼル宣言*は一九一二年に、戦争一般でなくて（戦争にはいろいろのものがあり、革命戦争もある）、一九一四年にはじまった、ほかならぬまさにあの戦争に評価をくだしたのであるが、この宣言は、第二インタナショナルの英雄たちの不名誉きわまるまったくの破産、そのまったくの変節を暴露する記念碑としてのこっている。

だから、私はこの宣言をこの版の付録として再録して、**この宣言のなかで、まさにこの切迫していた戦争とプロレタリア革命との関連について、的確に、明白に、率直に述べられている個所を、第二インタナショナルの英雄たちが用心ぶかく避けている――ちょうど泥坊が盗みを働いた場所を避けてとおるのとおなじように用心ぶかく避けている――事実にたいして、なおくりかえし読者の注意を仰ぐことにしよう。

四

本書で特別の注意がはらわれているのは、「カウツキー主義」にたいする批判、すなわち、世界のすべての国で、「もっともすぐれた理論家」である第二インタナショナルの指導者たち（オーストリアではオットー・バウアー一味、イギリスではラムゼー・マクドナルドその他、フランスではアルベール・トーマ、その他等々）、および多数の社会主義者、改良主義者、平和主義者、ブルジョア民主主義者、僧侶たちによって代表されている、国際的思潮にたいする批判である。

この思潮は、一方では、第二インタナショナルの解体と腐敗の産物であり、他方では、全生活環境のためブルジョア的および民主主義的な偏見にとらわれている小ブルジョアのイデオロギーの不可避的な果実である。

カウツキーとその同類のいだいているこの種の見解は、まさに、この著述家が数十年のあいだ、とりわけ社会主義的日和見主義（ベルンシュタイン、ミルラン、ハインドマン、ゴンパースその他の）との闘争でとくに擁護してきた、マルクス主義のあの革命的な原則の完全な放棄である。だから、全世界で、「カウツキー主義者」が今日、極端な日和見主義者（第二インタナショナルあるいは黄色インタナショナルを通じて）やブルジョア諸政府（社会主義者の参加しているブルジョア連立内閣を通じて）と実践的＝政治的に結合するようになったのも、偶然ではない。

全世界で成長しつつあるプロレタリア革命運動一般、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とくに共産主義運動は、「カウツキー主義」の理論的誤りを分析し暴露しないではすまされない。まして、平和主義や「民主主義」一般――これらは、マルクス主義たることをすこしも僭称してはいないが、カウツキー一派とまったく同じように、帝国主義の諸矛盾の深さと、帝国主義が生みだす革命的危機の不可避性とを塗りつぶしている――、これらの潮流がいまなお全世界にきわめて強くひろまっているので、なおさらである。そして、これらの潮流と闘争することは、プロレタリアートの党の義務である。プロレタリアートの党は、ブルジョアジーに愚弄されている小経営主と多かれすくなかれ小ブルジョア的な生活条件のもとにおかれている幾百万の勤労者とを、ブルジョアジーから奪いかえさなければならないのである。

五

第八章『資本主義の寄生性と腐朽』について数言のべなければならない。すでに本書の本文で指摘してあるように、かつては「マルクス主義者」であり、いまではカウツキーの戦友であり、「ドイツ独立社会民主党」*内のブルジョア的、改良主義的政策の主要な代表者のひとりであるヒルファーディングは、公然たる平和主義者で改良主義者であるイギリス人ホブソンにくらべて、この問題では一歩後退している。全労働運動の国際的分裂は、いまではもう完全に明るみに出ている（第二インタナショナルと第三インタナショナル）。また二つの潮流のあいだの武装闘争と内乱の事実も、やはり明るみに出ている。すなわち、ロシアでは、ボリシェヴィキに反対してメンシェヴィキと「社会革命党員」がコルチャックとデニキンを援助しており、ドイツでは、スパルタクス団**に反対してシャイデマンの徒とノスケ一派がブルジョアジーに協力している。フィンランドやハンガリア等でも同様である。では、この世界史的な現象の経済的基礎はどこにあるか？

それはまさに、資本主義の最高の歴史的段階すなわち帝国主義に特有な、資本主義の寄生性と腐朽とのうちにある。この小著のなかで証明されているように、資本主義は今日、ひとにぎりの（地上人口の一〇分の一にも満たない、もっとも「おおような」誇大な計算でも五分の一に満たない）とくに富裕で強力な国家を分離させたが、これらの国家は、単なる「利札切り」によって全世界を略奪している。資本の輸出は、戦前の価格と戦前のブルジョア統計によっても、年に八〇億―一〇〇億フランの収入をもたらしている。いまでは、もちろん、その額は

ずっと大きい。

このような巨額の超過利潤（というのは、この利潤は、資本家たちが「自」国の労働者から搾りあげている利潤以上に余分に得られるものだから）の一部で、労働者の指導者と労働貴族の上層とを買収できることは明白である。そして「先進」諸国の資本家は、彼らを現実に買収している、――直接および間接の、公然および隠然の、種々さまざまの方法によって、買収している。

ブルジョア化した労働者あるいは「労働貴族」のこの層は、その生活様式、その稼ぎ高、その全世界観の点で、まったく小市民的であって、それは第二インタナショナルの主要な支柱であり、また今日ではブルジョアジーの主要な社会的支柱（軍事的支柱ではないが）である。なぜなら、彼らは、労働運動の内部におけるブルジョアジーの真の手先であり、資本家階級の労働者手代(Labour lieutenants of the capitalist class)であり、改良主義と排外主義の真の伝達者だからである。プロレタリアートとブルジョアジーとの内乱では、彼らは不可避的に、しかもすくなくない数で、ブルジョアジーのがわに立ち、「コンミューン派」に反対して「ヴェルサイユ派」*に味方する。

この現象の経済的根底を理解することなしには、またその政治的および社会的意義を評価することなしには、共産主義運動ときたるべき社会革命との実践的任務の解決という面で、一歩もすすむことができない。

帝国主義はプロレタリアートの社会革命の前夜である。このことは、一九一七年以来、世界的規模で確証された。

一九二〇年七月六日

エヌ・レーニン

最近の一五年ないし二〇年、とくにアメリカ＝スペイン戦争（一八九八年）*とボーア戦争（一八九九―一九〇二年）**以後、旧世界と新世界の経済文献とは、われわれの生活している時代を特徴づけるために、「帝国主義」という概念について論じることがますます多くなっている。一九〇二年にロンドンとニューヨークで、イギリスの経済学者J・A・ホブソンの著書『帝国主義』が出版された。この著者は、ブルジョア社会改良主義と平和主義の見地――本質的には、かつてのマルクス主義者K・カウツキーの現在の立場と同じ見地――に立っているが、しかし、帝国主義の基本的な経済的および政治的特質の非常にすぐれた詳しい記述をあたえている。また一九一〇年にはウィーンで、オーストリアのマルクス主義者ルドルフ・ヒルファーディングの著書『金融資本論』が出版された（ロシア訳――モスクワ、一九一二年）。この著書は、貨幣理論の問題での著者の誤りと、マルクス主義を日和見主義と和解させようとする一定の傾向があるにもかかわらず、「資本主義の発展における最新の局面」――ヒルファーディングの著書の副題はこう言っている――のきわめて貴重な理論的分析の書である。この数年間に帝国主義について――とくに、この題目にかんする雑誌や新聞のおびただしい数の論文のなかで、またたとえば一九一二年の秋にひらかれたケムニッツとバーゼルの両大会***の決議のなかで――述べられたことは、本質的には、上述の二人の著者によって説かれた、もっと正確にいえば、概括された思想の範囲を、ほとんど出ていない。

以下にわれわれは、帝国主義の基本的な経済的諸特質の関連と相互関係とを、簡単に、できるだけ平易な形で叙述しようとおもう。この問題の経済的でない面について詳しく立ちいることは、それがどんなにやりがいのあることであっても、われわれとしてはそれをしないことにする。なお、文献の指示やその他の注は、かならずしも読者の全部に興味があるものではないので、巻末につけておく****。

一　生産の集積*****と独占体

工業の巨大な発達とますます大規模な企業への生産の集中の驚くほど急速な過程とは、資本主義のもっとも特徴的な特質の一つである。この過程については、近代の工業調査がきわめて完全で的確な資料を提供している。

たとえばドイツでは、工業企業一、〇〇〇につき、大企業、すなわち五〇人以上の賃金労働者をもつものは、一八八二年には三つ、一八九五年には六つ、一九〇七年には九つであった。そして、労働者一〇〇人につき、これらの企業に属するものは、それぞれ二二人、三〇人、三七人であった。だが、生産の集積は労働者の集積よりもはるかに激しい。なぜなら、大経営における労働ははるかに生産的だからである。このことは、蒸気機関と電動機にかんする資料がしめしている。ドイツで広い意味で工業と呼ばれているもの、すなわち商業や交通機関その他をふくめたものをとると、つぎのような情景がえられる。すなわち、三、二六五、六二三の経営のうち、大経営は三〇、五八八、すなわち全体のわずか〇・九%である。ところが、大経営に属する労働者は、一四四〇万のうちの五七〇万人、すなわち三九・四%、蒸気機関は、八八〇万馬力のうちの六六〇万馬力、すなわち、七五・三%、電力は、一五〇万キロワットのうちの一二〇万キロワット、すなわち七七・二%である。

経営の一〇〇分の一に満たない部分が蒸気力と電力の総量の四分の三以上をその手におさめている！　そして、全企業数の九一%を占める二九七万の小企業（五人未満の賃金労働者を使用するもの）には、蒸気力と電力のたった七%しか属していない！　数万の最大級の企業がすべてであり、数百万の小企業は無である。

千人以上の労働者をもつ経営は、ドイツでは一九〇七年には五八六あった。これらの経営は、労働者総数のほとんど一〇分の一（一三八万人）と、蒸気力と電力の総量のほとんど三分の一（三二%）をもっている。[1] 貨幣資本と銀行は、あとで見るように、ひとにぎりの最大級の経営のこの優越をよりいっそう圧倒的なものとする。しかもそれは、まったく文字どおりの意味でそうである。すなわち、数百万の中小の「経営主」と一部の大「経営主」さえもが、実際に、数百の金融業の百万長者の完全な隷属下におかれているのである。

（1）数字は、『ドイツ帝国年鑑』、一九一一年、ツァーン、からの摘要。

現代資本主義のもう一つの先進国である北アメリカ合衆国では、生産の集積の成長はいっそう激しい。ここでは、統計は狭義の工業を別にとりだして、経営を、年生産物の価額の大きさによって分類している。一九〇四年には、一〇〇万ドル以上を生産する最大級の企業は、一、九〇〇（二一六、一八〇のうち、すなわち〇・九%）であって、これらの企業に属する労働者は一四〇万人（五五〇万人のうち、すなわち二五・六%）、生産額は五六億ド

ル（一四八億ドルのうち、すなわち三八％）であった。五年後の一九〇九年には、右に相応する数字は、企業数――三、〇六〇（二六八、四九一のうち――一一％）、労働者数――二〇〇万人（六六〇万人のうち――三〇・五％）、生産額――九〇億ドル（二〇七億ドルのうち――四三・八％）である。[1]

（1）『合衆国統計要覧』、一九一二年、二〇二ページ。

国の全企業の総生産額のほとんど半分が企業総数の一〇〇分の一のものの手中にある！　そして、これら三千の巨大企業は二五八の工業部門にわたっている。このことから、集積は、その発展の一定の段階では、おのずからいわばぴったりと独占に接近してくる、ということが明らかである。なぜなら、わずか数十の巨大企業にとっては相互の協定に達することはわけないし、他方では、まさに企業の規模が大きいことのために、競争が困難となり、独占への傾向が生みだされるからである。競争の独占へこのような転化は、最新の資本主義経済におけるもっとも重要な現象の一つ――たとえもっとも重要な現象ではないとしても――である。そこでわれわれは、この点をもっとくわしく論じる必要がある。だが、まずはじめに、われわれは、おこりうる一つの誤解をかたづけておかなければならない。

アメリカの統計のしめすところによれば、二五〇の工業部門に三千の巨大企業があることになる。これによると、各部門に最大規模の企業が一二しかないことになるであろう。

だが、事実はそうではない。あらゆる工業部門に大企業があるわけではない。他方では、最高の発展段階に達した資本主義のきわめて重要な特質は、いわゆるコンビネーション、*すなわち、さまざまな部門が一個の企業に結合することである。これらの工業部門は、原料加工の連続した段階をなす（たとえば、鉄鉱石から銑鉄を精錬し、つぎに銑鉄を鋼鉄に精製し、さらにおそらくは鋼鉄からあれこれの完成品を製造する）工業部門であることもあるし、あるいはある部門が他の部門にたいして補助的な役割を演じる（たとえば、廃物または副産物の加工、包装材料の生産、等々）ような関係にある工業部門であることもある。

ヒルファーディングはこう書いている。「コンビネーションは、景気の差異を平均化し、したがって複合された事業にとって利潤率のより大きな安定性を保障する。第二に、コンビネーションは商業の排除に導く。第三に、それは技術的進歩の可能性を生みだし、したがって『純粋の』事業（すなわち複合されていない事業）にくらべ

て超過利潤を得させる。第四に、それは、原料価格の下落が製品価格の下落よりもおくれる強度の不景気（事業の沈滞、恐慌）の時期の競争戦で、『純粋の』事業にくらべて複合された事業の立場をつよめる」[1]。

（1）『金融資本論』ロシア語訳、二八六―二八七ページ〔林要訳、大月書店、三一七ページ〕。

ドイツのブルジョア経済学者ハイマンは、ドイツの鉄工業における「混合」企業すなわちコンビネーションの記述のために特別の一書をあらわして、つぎのように言っている。「純粋事業は、高い原料価格と低い製品価格とのあいだで圧しつぶされて、破滅しつつある」と。そこで、つぎのような情景になる。「一方には、数百万トンの石炭採掘高をもち、石炭シンジケートにかたく組織された大石炭会社がのこり、そしてこれらの会社には、大製鋼所とその鉄鋼シンジケートが緊密に結合している。年に四〇万トン（一トンは六〇プード）の鉄鋼を生産し、膨大な量の鉱物や石炭を採掘し、鉄鋼製品の生産を行い、工場地区の労働者長屋に一万人の労働者を住まわせ、そしてときには自分の鉄道や港湾さえもっている巨大企業、――これらの巨大企業は、今日ではドイツの鉄工業の真の典型である。こうして、集積はますます進展している。個々の経営はしだいに大規模となり、同一産業部門あるいは異なった産業部門のますます多くの経営が巨大企業に結合され、そしてこれらの企業にとっては、ベルリンの六大銀行が支柱とも指導者ともなっている。ドイツの鉱山業については、集積にかんするカール・マルクスの学説の正しさがまさしく証明されている。工業が保護関税と運賃とによって保護されている国では、たしかにそのとおりである。ドイツの鉱山業は、収奪されてよいほどに成熟している」[1]。

（1）ハンス・ギデオン・ハイマン『ドイツの大鉄工業における混合企業』、シュトゥットガルト、一九〇四年（二五六、二七八ページ）。

例外的に正直な一ブルジョア経済学者は、このような結論に到達せざるをえなかった。だが注意しておかなければならないことは、ドイツ工業が高い保護関税で保護されているため、彼がドイツをまるで特別あつかいしていることである。しかし右の事情は、集積と、企業家の独占団体すなわちカルテルやシンジケート等々の形成とを、促進しただけにすぎない。きわめて重要なことは、自由貿易の国であるイギリスでも、集積は、いくらかおくれて、またおそらくは別の形態でではあっても、やはり独占に導きつつある、ということである。ヘルマン・レヴィ教授は「独占、カルテルおよびトラスト」についての特別の研究のなかで、大ブリテンの経済的発展の資

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com